

3. 教員養成系大学の講義における視覚メディアの活用をめぐって —— 学生の障害者の態度変容に及ぼすビデオ映像の効果 ——

都 築 繁 幸 (愛知教育大学)

1. はじめに

筆者は、現在、教員養成系大学において養護学校教諭免許状を付与させるための講義を担当している。昨今ではボランティア活動が盛んになったとはいえ、学部の学生は障害者に接する機会もそんなに多くはない。講義中心の授業では、現実感に乏しく、障害者の実像を掌握しない段階で実践的教育論を展開しても学生は講義内容を理解できないことが多い。講義に先立ち、実際に養護学校や聾学校を見学し、障害児と接することが必要だと思われるが、通常の授業日に臨地的な授業を組み込むことは不可能である。しかし、学生は障害者の実像を知りたがっている。そこで過密な講義スケジュールで学んでいる学生に負担がないように、かつ学生に障害者の現実的な姿を少しでも目に触れさせながら基本的な事項を学べるように工夫していく必要がある。

筆者の担当科目のうちの「障害児教育学概説Ⅰ及びⅡ」は、障害児教育専攻の2年次生及び他の専攻でありながら副免許として養護学校教諭免許状を取得したい学生のために開設された入門的な講義である。この講義を担当して6年目になるが、学生に何とか興味を持たせるように毎年、工夫を重ねてきた。コースシラバス等もその一つであるが、最も中心的なことは、可能な限りビデオ教材を使用することである。これは、臨地体験の代替手段として教室内で可能な限り、障害者のイメージを高めることを意図している。通常、半期、2単位の講義では15～16回の授業がなされる。筆者は、この講義では、毎回、必ず何らかのビデオ教材を利用している。使用するビデオは日頃から収集したものがほとんどであり、テープライブラリーとして市販されているものはあまり、使用しない。これらのテープを再編集したり、必要な個所のみを提示し、あくまでも教授内容に関連したものである。講義時間の配分は、ビデオが30分程度、テキストの解説、テキストの質疑応答、討論が60分である。

本研究は、教員養成系大学の講義で視覚メディアの活用を推進していくための基礎的なものである。本稿では、学生の障害者の態度変容に及ぼすビデオ映像の効果を検討したものの一部を報告する。具体的には、講義開始前と講義終了後に学生に障害者像を評価させ、障害者像が変容したかどうかについて述べる。

2. 方法

2.1. 対象

信州大学教育学部において平成11年度前期に開講された「障害児教育学概説Ⅰ」を受講した学生、75名とした。ただし、今回の分析は、障害児教育専攻学生の2年生、20名とした。これらの学生は、全ての講義に出席したものである。学生には、事前に調査される旨等、一切、通知

されていない。

2.2. 手続き

受講前および受講後に質問紙を配布し、与えられた語句について14の形容詞対に対し学生の障害者に対するイメージを5段階評定で求めた。イメージを求めた語句は「肢体不自由児、精神薄弱児、聾児、盲児、老人、孤児、健常児」の七つである。ここでは、障害児に関連した語句として肢体不自由児、精神薄弱児、聾児、盲児を取り上げた。社会的弱者に関連した語句として老人、孤児を取り上げた。これらの語句の統制用として健常児を取り上げた。老人、孤児、健常児は、ここでは、一応、障害を持たない人々を示す語句として用いた。

2.3. 講義の概要とビデオの利用

通常ならば、半期にわたって16回行う講義を今回、筆者の諸般の事情により、土曜と日曜をセットにして2週連続して行うことになった。4日間の連続の集中講義方式ではないが、こうした日程による講義の実施は学生にとっても筆者にとっても初めての体験である。おおよその講義日程は以下のようなものである。①から④、⑤から⑧、⑨から⑫、⑬から⑯が、夫々、1日の講義である。

- ① オリエンテーション 視覚障害の定義、原因及び出現率、心理的特性、教育的配慮等
- ② 視覚障害関連のビデオ
- ③ 聴覚障害の定義、原因及び出現率、心理的特性、教育的配慮等
- ④ 聴覚障害関連のビデオ
- ⑤ 言語障害の定義、原因及び出現率、心理的特性、教育的配慮等
- ⑥ 言語障害関連ビデオ
- ⑦ 知的障害の定義、原因及び出現率、心理的特性、教育的配慮等
- ⑧ 知的障害関連ビデオ
- ⑨ 情緒障害の定義、原因及び出現率、心理的特性、教育的配慮等
- ⑩ 情緒障害関連ビデオ
- ⑪ 運動障害の定義、原因及び出現率、心理的特性、教育的配慮等
- ⑫ 運動障害関連ビデオ
- ⑬ 障害者運動
- ⑭ 障害者運動関連ビデオ
- ⑮ 世界の障害児教育の動向
- ⑯ 世界の障害児教育の動向関連ビデオ

2.4. 結果の処理

講義開始前と講義終了後に学生に障害者像を評価させ、その得点差を検討した。その差が統計的に有意であれば、七つの標的語に関する各項目(形容詞対)において態度が変容した、と捉えた。

3. 結果

図1から図7は、講義開始前と講義終了後の平均得点を示している。ここでは、両時期の得点差が統計的に有意なものとして認められたもののみをとりあげる。

肢体不自由児では、「良い－悪い」、「明るい－暗い」に有意差が認められ、講義終了後の得点の方が講義開始前のそれよりも得点が高かった。

精神薄弱児では、「信頼できる－信頼できない」、「能動的な－受動的な」に有意差が認められ、講義終了後の得点の方が講義開始前のそれよりも得点が高かった。

聾児では、「強い－弱い」、「能動的な－受動的な」に有意差が認められ、講義終了後の得点の方が講義開始前のそれよりも得点が高かった。

盲児では、「良い－悪い」、「能動的な－受動的な」に有意差が認められ、講義終了後の得点の方が講義開始前のそれよりも得点が高かった。

老人、孤児、健常児においては得点差が統計的に有意な形容詞対は見られなかった。

4. 考察

今回の結果では、障害児教育概説で扱った障害種において一部の形容詞対で有意差が見られた。それに対し、講義で扱わなかった語句については全く、有意差が認められなかった。老人、孤児、健常児については、少なくとも2週間という講義前後の時間差の範囲では学生の態度は変容していない。障害を含まないこうした語句に対する学生の印象は、おおよそ一定であり、固定化したものとして受け止めることができる。各種のビデオを使用したか、少なくとも障害を持たない人々として考えた「老人、孤児、健常児」のイメージには映像効果が示されなかった。もし、老人、孤児、健常児を含めた七つの語句の全てに有意差が示されたならば、人間全般に対する態度構造の変容に映像効果が認められると考えることができる。しかし、障害児教育概説で扱った障害種のみには有意差が見られ、講義で扱わなかった語句については全く、有意差が示されなかった。従って、今回の講義で用いた肢体不自由、知的障害、聴覚障害、視覚障害のビデオが学生の態度に何らかの影響を与えたものと推測される。

このことから、障害児教育の授業において障害に関する映像を活用することが学生の講義への関心度を高め、障害観の変容につながっていくものと期待される。例えば、講義後には、肢体不自由児においてはより明るいと感じるようになり、知的障害児には、より信頼でき、能動的だと感じ、聾児においてもより強く、能動的に、盲児にはより良く、能動的に感じるようになったことが示されている。全体的に障害児をより能動的な存在として捉えるような傾向が示されている。

学生に障害者に対する態度を変容させるには、健常者による講演(講義)、障害者による講演、障害を疑似体験するシュミレーション法、読書(文献を指定し、レポートを作成させる)などの方法が考えられる。講義で映像を利用することは、障害者による講演やシュミレーションを含んだ機能をも期待することができよう。

今回の分析は、極めて初歩的なものであるが、大学の講義に視覚メディアを活用し、効果的な指導を追求していくことの有効性は示唆されたと思われる。障害者に対する学生の態度構造を質問紙法で検討したところ、学生の専攻によっても異なることが示された(都築, 1997)。今

後、同様な分析を他の専攻学生にも試みる必要があろう。また、今回の講義は、基礎的、入門的なものである。今後、講義のレベルがより高度になった場合にも同様な傾向が認められるかどうか、即ち、講義の内容の水準をも視点に入れて検討していく必要があろう。

5. おわりに

現在、教員養成系大学では、実践的指導力のある教員を輩出することが社会的使命とされており、障害児教育に従事する教員の障害観や感性を十分に養成していくことが課題とされている。そのためには教授法を工夫していく必要がある。障害児教育分野では、視覚メディアを有効に活用していくことが少なくとも一つの方法として提言できよう。

文献

都築繁幸 1997 障害者に対する学生の態度に関する研究(1)―専攻と障害の関係を中心に―
放送教育開発センター研究紀要, 14, 21-35.

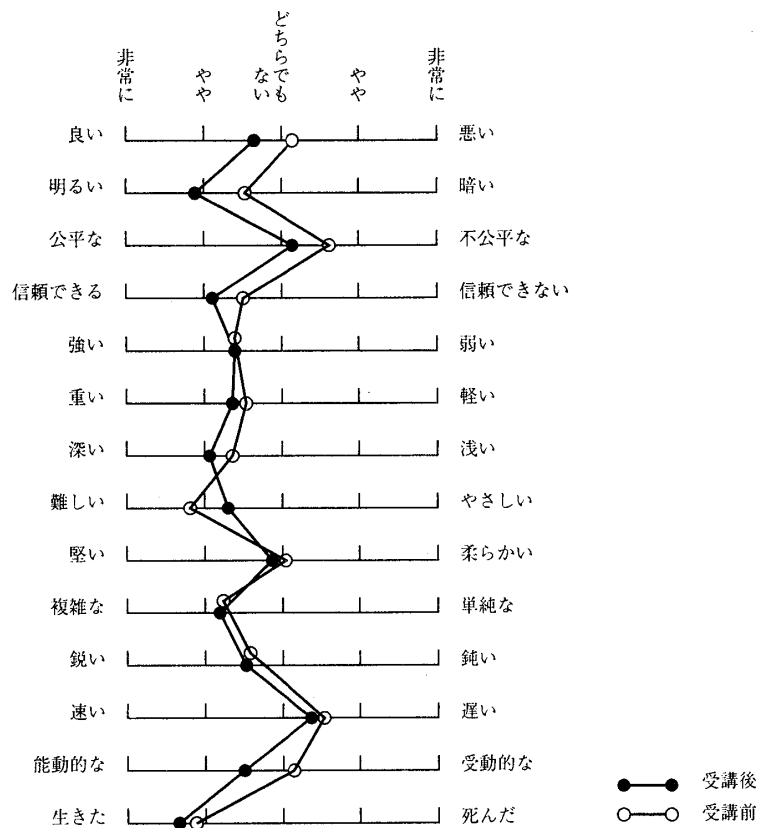


図1 「肢体不自由児についてどう思いますか？」

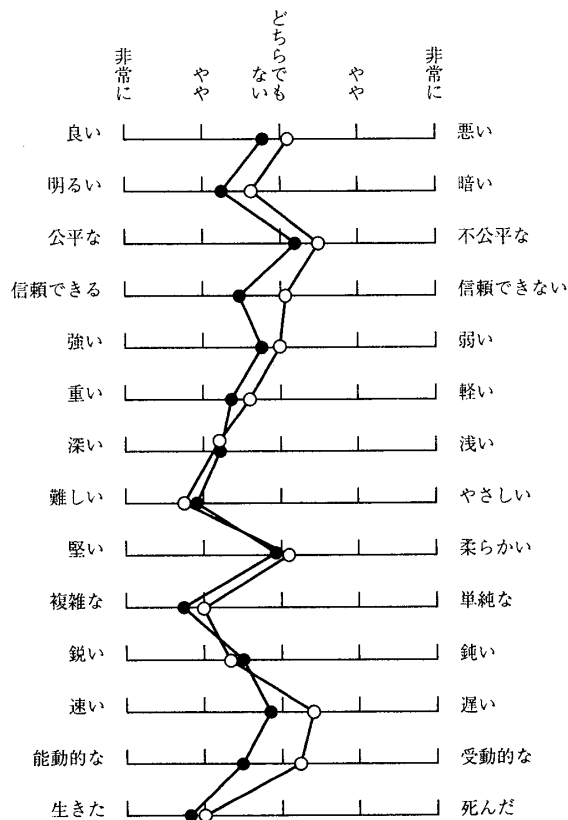


図2 「精神薄弱児についてどう思いますか？」

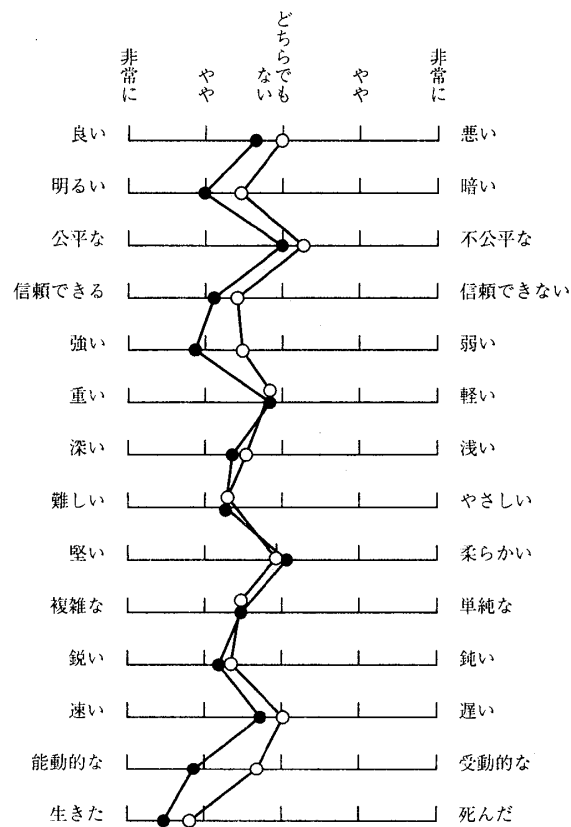


図3 「蜂蜜についてどう思いますか？」

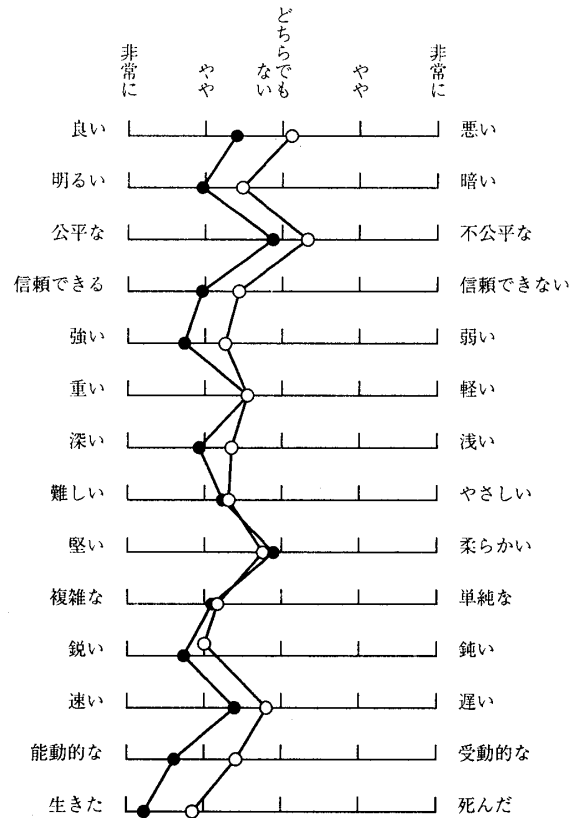


図4 「盲児についてどう思いますか？」

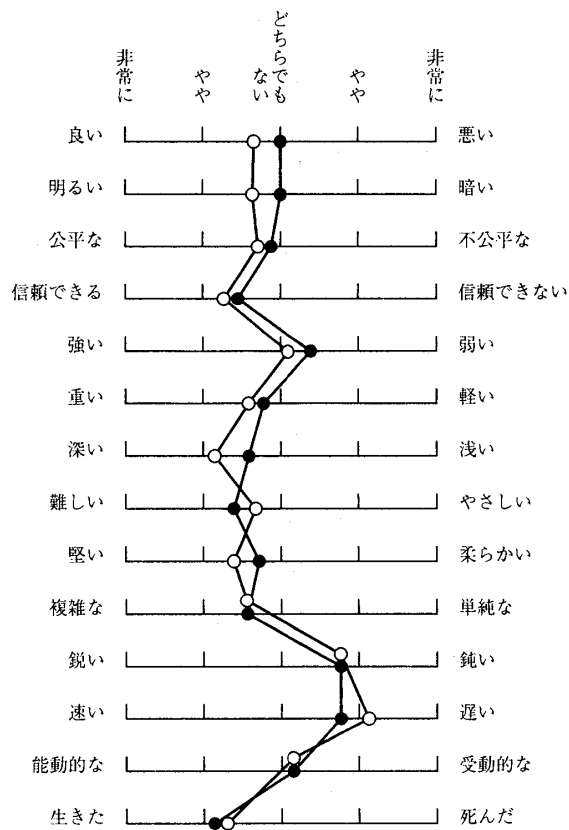


図5 「老人についてどう思いますか？」

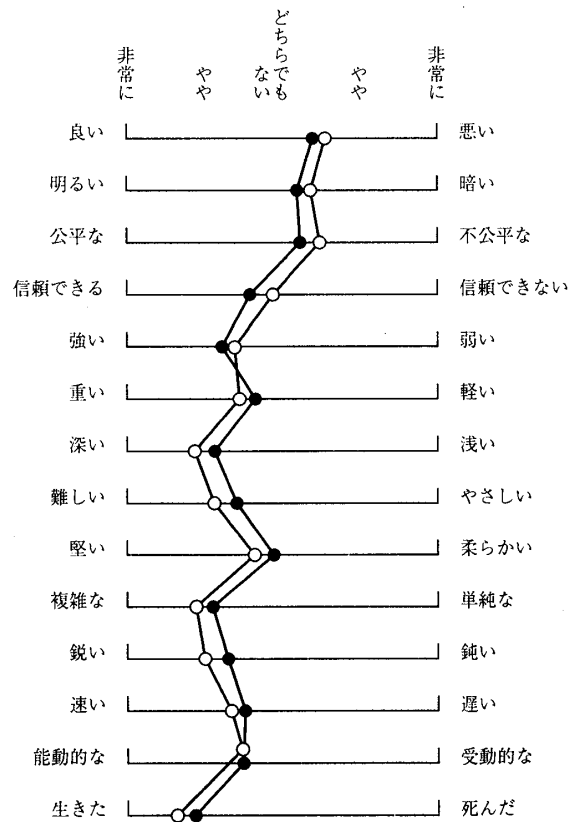


図6 「孤児についてどう思いますか？」

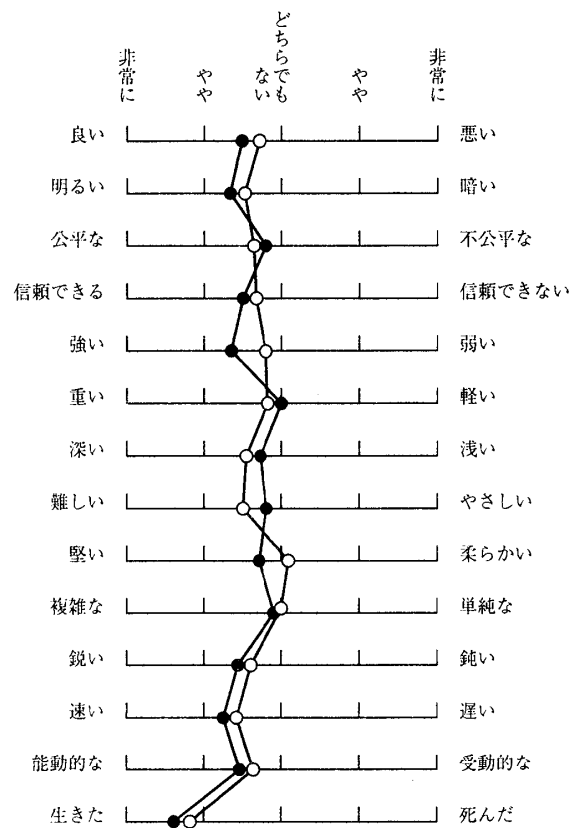


図7 「健常児についてどう思いますか？」